

められて自盡したと口碑にいふが、烏有の人物であらう。義宗は能登誌に綱連に作つてゐる。法徳九年八月六日阿部判□□と書いた

珠洲・鳳至の郡境に關する文書はあるが、それは寛文九年珠洲郡大町泥木の里民が、鳳至郡某村と入會地を争うた際初めて加賀藩に提出せられ、是によつて勝訴を得たもので、その眞實は言ふを待たぬ。

アペリユウタイ 阿部龍堆 嘉永・安政頃の人で、鳳至郡門前の酒造家であつた。泉龍璋・横山清暉に學び、又龍岱とも雲霞堂とも號して書を善くした。

アホクサイキヨウカ 阿北齋狂歌 一冊。堀越左源次著。題號を阿北齋狂歌として、同人の序文があり、以下その作を列擧してある。

アホクサイジヤクオウキヨウカシユウ 阿北齋翁狂歌集 ↓ジヤジヤムジヤシユウ 治哉治哉無邪集。

アマイケ 雨池 江沼郡會宇の山。芝憩紀開に、この村の奥に雨池と名づける松山があると記する。

アマイケ 天池 白山の尾添口登路千翠、鼻即ち今いふ馬の背越から上にある池。白山圖解に『天池の室は方一間、板圍にて甚だ丈夫に作る。三方は高き石垣にて風を防ぐ。前に二間四方計の池あり。後の方に八間四方計の池あり。是を天池といふ。』とあるが、この室戸は今存在せぬ。天池の文字は白山記に、『又山頂有池號雨池。傍有堂宇室二字。安置三所御鉢寶社。』とあるが、永正の白山禪頂私記には、既に天池と記してゐる。

アマイケ 天池 石川郡富樫庄に屬する部落。

アマイケムロド 天池室戸 ↓アマイケ天池。

アマイハ 雨岩 能美郡西俣にある岩石。能美郡名蹟誌に、西俣村雨岩に九尺に二間許の窟があつて、その窟内に辨財天を祭つてあつたが、堂宇は今朽敗してゐる。又窟の口なる岩石のわれめから、毎年梅雨の頃蛇の胴体が見えたとある。

アマガミ 雨神 白山尾添口登路なる加賀洞から上にあつたといふ。白山記に、壺水を叙した次に、『次坂下畢。有二王子。雨神云。此、神蛇牀王垂迹也。』とある。

アマゴゼンミサキ 尼御前岬 江沼郡千崎の西北方海角で、斷崖をなしてゐる。往時は尼子瀬といひ、海人の管屋のあつた所であるといふ。

アマザキ 海士崎 羽咋郡千浦の西方岬角で、一に尼崎とも書く。能登名跡誌に、『尼崎と云あり。此所自然と蕪菜多く生ずる也。』とある。

アマザケマツリ 甘酒祭 羽咋郡免田の八幡神社は、九月十二日を以て秋季祭とするが、この日各戸麴と飯とを醗酵せしめた甘酒を作つて之を神前に供し、稱して甘酒祭といふ。同郡千浦では十二月十六日に行はれる。往時大火のあつた日を記念するものであるともいふ。

アマダ 雨田 羽咋郡の舊村名。郷村名義抄に、狹谷村・岩田村・坪野村・宿女村を雨田村といふとあり、正保・寛文・貞享の高辻帳にも雨田村がある。延享の書付に、前記四ヶ村を雨田四谷といふとも見える。

アマダゴエ 天田越 河北郡九折から越中西礪波郡安樂寺に越える山路をいふ。

アマタニ 雨谷 タマ 羽咋郡二所宮の内の小字。

アマダホ 甘田保 羽咋郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目録に、『甘田保、貳町六、元久元年檢立田定。』と見える。後世亦甘田保の名を存する。

アマダホ 甘田保 羽咋郡に屬し、藩政時代では、柴垣・澁谷・坪野・岩田・狹谷の五村を含んで居た。

アマノタカミチ 天野高道 通稱半右衛門。元和三年父墨田道節の遺知二百石を襲ぎ、母の氏によつて天野と稱した。寛文元年歿。子孫相繼いで藩に仕へた。

アマノトホマサ 天野遠政 ↓ヨシミウヂ 吉見氏。

アママチ 海士町 鳳至郡に在り、もと大屋庄に屬する獨立の部落で輪島海士と呼ばれたが、今は輪島の一部になつて居る。この海士は永祿十二年から筑前金ヶ崎の者で、毎年羽咋郡赤住、鳳至郡吉浦、皆月に來漁する者があつたが、文祿三年から鳳至郡鶴入に住し、元和三年から光浦に移り、慶安二年十月に今の地に轉じたものと、舩倉島舊記に載せて居る。その筑前金ヶ崎と傳へるものは越前金ヶ崎の誤であらう。能登名跡誌の一本に、『海士町は鳳至町の西、輪島崎の間に在り。昔は越前國より夏毎に來り、此沖を稼ぎしに、中頃より此所に在住をして、今も諸役御免也。初はかすかなる住居にてありしに、次第に榮えて、家居よく並び立て百軒餘あり。肝煎一人役一人あり。夏中は番頭の者留守頭一人殘

し、不殘十八里沖なる重蔵島といふに渡り、邊りの小島又は七里此方の七つ島などを掃ぎて、多く鮑類・海藻を取りて、九月になれば戻り來る也。』とある。現代に於いては六月より十月に至る間舩倉島に移りて漁撈に従ひ、島より一旦本居に歸つた後、更に海岸に沿つて舟を進め、七尾に至るまで蟻蝶・モダツ其の他の植物と米麥豆等とを交換し、十二月に至りて再び歸郷するを例とし、之を離廻りといふ。藩政時代の海士の産物は鬘斗蛇・蒸蛇・批蛇であつた。

アマミハギ・あまみはぎ 能奥でもと一月六日に行はれた行事。素襖を着し、天狗面を被つて幣帛を持つた者が主となり、同じく天狗面を被り鬘と槌とを持つた者と楠木を持つた者、及び猿面を被り袋を擔うた者が之に従ふ。一行の毎戸に入るや、その主なる者正面に進みて拍手し、幣帛を振つて祓をなし、從者は手眞似で餅を出せといふ。その餅を出すこと運きときは、鬘と槌とで爐縁に孔を穿つかけて餅を興へる時は、擔ひたる袋に收めて去る。この餅の一部は一行が食し、他は賣却してその代金を神社に献ずるのである。

アマヨヘイロク 雨夜平六 大聖寺の藩士。祿二百石。平六才智辯舌衆に勝れ、書を好み、兵學は山鹿の一流を極め、又亂舞を習ひ、狂歌をも能くし、大器量人と稱せられた。藩主前田利直時代の人で、利章の側小姓を勤めたこともある。

アマリベゴウ 餘戸郷 鳳至郡の古郷名で、安萬利倍と訓む。所在は今詳かでない。

アマリベゴウ 餘戸郷 珠洲郡の古郷名で、